

壮麗な調べ チェリスト37人が饗宴

(三浦興一撮影)

天皇、皇后両陛下が来場され、5日、東京・赤坂のサントリーホールで「チェロ・グランド・コンサート」が催された。このコンサートはウィーン国立歌劇場音楽監督の小澤征爾(73)をはじめ、世界の第一線で活躍する音楽家を輩出する桐朋学園(東京都調布市)の音楽部門同窓会が主催したもの。桐朋学園は、チェリストで指揮者、教育者の斎藤秀雄(1902～74年)が創設に尽力し、後進の指導や育成に心血を注いで、半世紀の間に名だたるチェリストを世に出しているが、草創期から現在の学生までを代表して総勢37人が一堂に集まり、豊穡の響きの祭典となった。

書き下ろし作品

20世紀を代表するチェロの巨

星、パブロ・カザルス(1876～1973年)の「サルダーナ」の重厚な音楽で始まったステージは、カザルスに師事した平井丈一郎(71)が、この日のために書き下ろした「チェロ・アンサンブルのための頌歌」＝写真＝が続く。

作曲家でもある平井は、「カザルスからチェロの大合奏のための作品を書くようにと促され、良いものを書きたいと念じながらも、半世紀近くが過ぎてしまいました。今回こそ、師の言葉に答える機会と筆を執り、奏者一人一人の顔が頭に浮かびながら作曲しました」と語る。

「今の不安な世相を反映するような混沌とした序奏を経て、次第に曲想は盛り上がりませんが、チェリストが集まれば、明るい未来の希望を描くことができます」という構成は、平和



を祈って国連本部で演奏をした師の偉大な精神に通じるかのようだ。

人間の声に近い楽器

若い世代の筆頭格である東京都交響楽団首席奏者の古川展生(35)は、ヴィラ＝ロボスの「ブラジル風バツァ第5番」で8人のチェロを従えて霊妙なソ

ロを披露。「スーパースターがそろっているのに何で僕が」と照れながらも、オリジナルはソプラノが聴かせる愛の調べを豊潤な歌にして、人間の声に最も近い楽器の面目躍如だ。

深い祈りにも似たバツァ「ジャコンヌ」、壮麗なチャイコフスキー「弦楽セレナード」で大団円。「チェロをお弾きになる

天皇陛下、ピアノを愛される皇后陛下にお越しいただき、まことにありがたく存じます。大勢のチェリストが奇跡的に集まり、名古屋、富山と演奏を重ねて、桐朋学園の歴史を改めて重く受け止めています」。桐朋学園大学長で会の大いなる求心力となった堤剛の感慨は、誰よりも深かった。(谷口康雄)